

キャンパスノート

ノートの定番ブランド

学生時代を通じ、誰もが一度は使ったことがある「キャンパスノート」。オシャレでセンスのいいデザイン。根元からページを破ってもバラバラにならない丈夫なつくり。何よりも「キャンパス」という音の響き。これが新鮮でカッコ良かった。



商品開発の背景 舞台裏

生みの親のコクヨは、今では日本屈指の総合オフィスサプライヤーとして知られている。そのルーツは、1905(明治 38)年に富山県出身の黒田善太郎が大阪に開業した、和式帳簿の表紙店。これは手間のかかる表紙だけを作る商売で、当時でもかなり地味な仕事だった。が、誰もやりたがらないニッチな仕事にこそ可能性を見出した善太郎は、そこから洋式帳簿や伝票、便箋、ファイルなど、次々と新しい分野に進出。急速に事業を拡大してゆく。「買う身になってつくる」「良品廉価」をモットーにしたコクヨの製品は消費者に支持され、創業 50 周年を迎えた 1955(昭和 30)年には、既製紙製品メーカーとして押しも押されもせぬ存在となっていた。

同社が本格的にノートの開発を始めたのは、50 年代の後半になってから。ちょうど戦後の教育や文化が大きく変わりつつある時期だった。新しい時代のノートを作るなら、今しかない。後発だったコクヨのチャレンジが始まった。

新しい時代には、新しい機能を備えたノートが相応しい。そう考えたコクヨは、個性的なノートを次々と世に送り出す。1959(昭和 34)年4月、当時としては珍しい無線綴じの B5 ノートを発売。一般には表紙と中紙を重ねて二つに折り、折り目を糸で綴じる糸綴じが主流だったが、糸綴じはページを破ると片方のページも抜け落ちてしまう。中紙を背表紙に糊付ける無線綴じは、この欠点を解消するアイデアだった。その2年後には、切り取ってファイルできるミシン線付きの「フィラーノート」を発売。この製品には、新たにリングを使ったスパイラル綴じが採用された。

意匠ノート

1965(昭和 40)年、スパイラル綴じを採用したユニークなノートが登場する。表紙に人気イラストレーターの作品や美しい写真があしらわれたこの製品は、意匠ノートと呼ばれた。当時は無地の表紙のシンプルなノートがほとんどだったから、この製品のインパクトは極めて大きかった。

もちろん、そのターゲットは学生を中心とする若者たち。最も人気を集めたのは、海外の有名大学のキャンパス風景を描いたもの。当時の日本の学生たちにとって、欧米の大学のキャンパスは憧れの場所。アイビールックに身を包んだカッコイイ男女が、お喋りしながら楽しそうに歩いている——ケンブリッジやハーバードの美しく広大なキャンパスは、彼らに楽しく充実した学生生活を想像させた。

意匠ノートは大学生はもちろん、受験期の高校生にも厚く支持され、予想外の売上げを記録する。

コクヨはこのキャンパスのイメージを前面に押し出した新しいノートの開発に着手する。目標は、今までにない斬新なデザインと高い実用性を両立させること。

1975(昭和 50)年8月、初代キャンパスノートが誕生した。シンプルで飽きのこない、落ち着いたデザイン。控えめに描かれた“Campus”的ロゴが、今までのノートとの違いを鮮明に印象づけた。無線綴じがしっかりとしているのでバラバラになりにくいという実用的なメリットと、淡い色調のセンスの良さを感じさせるカラフルな表紙が、人気を集めた。

初代

2代目は、表面に中紙の罫内容を表示した。これは表紙を開けなくても罫の幅が分かるようにするための工夫。

2代目

3代目は、より斬新なデザインの表紙。縦に置かれた“Campus”的ロゴ。加えて淡いベース色と 1/4 の面積を占める濃色の縦ラインの大膽なデザイン。

3代目

4代目(現行商品)は、材料と機能の面で大きな進化をとげた。背クロスにはラミネート加工を施して耐久性をアップ。機能面では、表紙に名前欄とタイトル欄をプラス。また中紙にも新しい工夫を盛り込み、罫中に目印のポイントを加えて縦線を引きやすいようにした。

4代目

次のキャンパスノートはどんな形になっているのだろうか。